

平成 29 年 12 月 8 日

報道関係各位

公益財団法人水戸市芸術振興財団  
吉田秀和賞事務局

## 「第 27 回吉田秀和賞」贈呈式のおしらせ

拝啓 錦秋の候、貴下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、平成 2 年に創設されました吉田秀和賞は、優れた芸術評論を発表した人に対して賞を贈呈し、芸術文化を振興することを目的として当財団が運営しております。

第 27 回目となりました今回は、平芳幸浩氏の著書『マルセル・デュシャンとアメリカ戦後アメリカ美術の進展とデュシャン受容の変遷』(ナカニシヤ出版 2016 年 7 月刊)を受賞作品として発表いたしました。つきましては、賞の贈呈式を下記のとおり執り行う予定です。

ご多用のところとは存じますが、ご取材いただけましたら幸いに存じます。敬具

### 記

日 時 : 平成 29 年 12 月 17 日 (日) 午後 1 時 30 分から 2 時 30 分 (受付開始 1 時)  
会 場 : 水戸芸術館 会議場  
内 容 : 表彰状の授与/講評/受賞者あいさつ ほか  
受賞者 : 平芳幸浩 (ひらよし・ゆきひろ 50 歳 1967 年 7 月 13 日生)  
肩書き : 京都工芸繊維大学デザイン・建築学系准教授

### [著者略歴]

平芳 幸浩 (ひらよし・ゆきひろ)

1967 年大阪生まれ。京都工芸繊維大学デザイン・建築学系准教授。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士 (文学) (京都大学)。国立国際美術館学芸課 (2000~2008 年) を経て、2008 年より現職。

主な企画展覧会に「ヤノベケンジ MEGALOMANIA」(2003 年)、「マルセル・デュシャンと 20 世紀美術」(2004 年)、「小川信治 干渉する世界」(2006 年)、「現代美術の皮膚」(2007 年) など。

著書に『西洋近代の都市と芸術 3 パリ II 近代の超克』(共著) (天野知香編、竹林舎、2015 年)、*Wort-Bild-Assimilationen: Japan und die Moderne* (共著) Simone Müller, Ito Toru and Robin Rehm (eds.), Gebr. Mann, 2016、『アメリカ美術叢書 II 夢見るモダニティ、生きられる近代 アート・社会・モダニズム』(共著) (田中正之監修、ありな書房、2017 年) ほか。

公益財団法人水戸市芸術振興財団  
〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8  
TEL 029-227-8111 FAX 029-227-8110  
吉田秀和賞担当 大津良夫 川崎麻里子

## [審査員選評]

### 磯崎 新

『マルセル・デュシャンとアメリカ』を推選します。

平芳幸浩の『マルセル・デュシャンとアメリカ』は、デュシャン論の力作です。

関連本が無数にあるなか、著者は戦後アメリカ美術家のなかで、デュシャンの仕事に触発されて独自の方法を搜したアーティストに標的をしぼり、異説でもつれ合った糸のようになっている世界の現代美術言説網の一点突破を試みます。寝技、めくらましなど、禁じ手を駆使したデュシャン（さえも）を正攻法で押し切ろうとしている。賭けともみえる戦略ですが、並々ならぬ強腕、明晰な説得力に充ちている。要領よくアカデミックにまとめられている他の候補作品からは抜きんでしているとみえます。

デュシャンはマンハッタンに移住したけど、その地のNYアートは、グリーンバーグ（カント的趣味判断）それにつづくマイケル・フリード（展示性）が理論的支柱で、抽象表現に由来するよりアメリカ的なものが主流となり、デュシャンでさえもイリュージョンの一派とみなされ敵視されており、決して居心地よくはなかったと思われます。

この時代のアメリカはアレクサンドル・コジューヴが「動物性（アニマリティ）」と呼んだアメリカ的生活様式が満喫されており、美術界もまた反知性的エンタメ・アートばかりが幅をきかせている。その中で苦況にたたされていたデュシャンの救出（評価）方策を著者はティエリー・ド・デュヴの「制度としての芸術」論を手がかりにする。この論もまたカントの批判書読解に基づいていますが、「芸術」という制度を解体構築したメタ「芸術家」・デュシャン像が持ち出される。土俵を押し出されそうになったとき土俵を消去してしまう論理階梯操作です。この論理をつづけると<ミュージアム>の存在も拒絶されねばならないのですが、晩年にデュシャンの作品（物体）はすべて美術館におさまりました。歴史のアイロニーでしょうか。

NYアートとの乱戦では、私はデュシャンが敗軍の将のようにみえます。著者はその一部始終を記録します。アバンギャルド・モダニズムの敗戦記ですね。私はその心意気に共感しています。吉田秀和賞に推薦する理由です。

読後感です。タイトルにアメリカがついていますが、これはそっくり日本のデュシャン受容なのではなからうか。たしかにマンハッタンに起こった出来事ですが、その情報や当事者はパリやロサンゼルスより先に極東日本に到達しています。フルクサス（第四章）は同時進行でした。先述したコジューヴはアメリカ社会の「動物性」のつぎに、日本では同様の事態が既に四百年前から「道」に没入することを生きがいにする「スノビズム」がつづいている、と指摘します。これが「歴史の終わり」の後の世界のモデルだというわけです。デュシャン的思考法は野蛮なアニマリティ社会より、武道、茶道、色道、極道などのほうに親和性があることは、むしろ日本の戦後美術をみるといい。

このもろもろの「道」にはデュシャン以上の難問が含まれています。「好み」と「見立て」。横文字に訳せません。文字の老家中国にも通じません。それぞれ、趣味判断と慣習的制度にかかわっています。著者がデュシャンの解説戦略に用いた方策をこれにつづいて「道」の分析に適用してもらいたい。この著作でつくりだした戦略がさらにきわだってくるように思います。

---

### 片山 杜秀

孔子の『論語』はあまりに短い。しかも本人が書いたのではない。伝聞録だ。キリストも釈迦も同じようなものだ。本人のつもりは本当のところ、よく分からない。同時代の周囲の人々、そして後世の人々がほんの少しの材料を解釈し、斟酌し、忖度し、どれが正しいかが争われ、「孔子教」「キリスト教」「仏教」が生まれていった。要するに、本当に偉い人は余白だらけの人だ。何も言っていないかもしれない人だ。カントやヘーゲルのように全部言ってしまうと、歴史の一コマになる。だが、何も言わない偉い人は不断に誰かが余白を更新してくれる。実はこうなんじゃないかと。

20世紀芸術の孔子であり釈迦であるのがデュシャンだろう。正体について喧々囂々の議論が繰り返されてきた。だが著者は言う。デュシャンは居ないのだと。本書はデュシャン論ではない。「デュシャン教」の構造と歴史に切り込んだ先鋭な批評である。目が覚める。

## 「吉田秀和賞」について

■対象 音楽・演劇・美術などの各分野で、優れた芸術評論を発表した人に対して

■正賞 表彰状 ■副賞 賞金 200万円

■審査委員 磯崎 新 建築家

片山 杜秀 評論家・慶應義塾大学法学部教授

### ■吉田秀和賞 受賞作品一覧

- 第1回（平成3年度） 秋山邦晴『エリック・サティ覚え書』青土社 1990年6月刊
- 第2回（平成4年度） 持田季未子『絵画の思考』岩波書店 1992年4月刊
- 第3回（平成5年度） 該当作品なし
- 第4回（平成6年度） 渡辺保『昭和の名人 豊竹山城少掾』新潮社 1993年9月刊
- 第5回（平成7年度） 松浦寿輝『エッフェル塔試論』筑摩書房 1995年6月刊
- 第6回（平成8年度） 長木誠司『フェルッチョ・ブゾーニ』みすず書房 1995年11月刊
- 第7回（平成9年度） 伊東信宏『バルトーク』中央公論社 1997年7月刊
- 第8回（平成10年度） 該当作品なし
- 第9回（平成11年度） 青柳いづみこ『翼のはえた指 評伝 安川加壽子』白水社 1999年6月刊
- 第10回（平成12年度） 小林頼子『フェルメール論 一神話解体の試み』八坂書房 1998年8月刊  
小林頼子『フェルメールの世界 17世紀オランダ風俗画家の軌跡』  
日本放送出版協会 1999年10月刊
- 第11回（平成13年度） 加藤幹郎『映画とは何か』みすず書房 2001年3月刊
- 第12回（平成14年度） 該当作品なし
- 第13回（平成15年度） 岡田温司『モランディとその時代』人文書院 2003年8月刊
- 第14回（平成16年度） 湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキー 死者のモニュメント』  
水声社 2004年7月刊
- 第15回（平成17年度） 宮澤淳一『グレン・グールド論』春秋社 2004年12月刊
- 第16回（平成18年度） 有木宏二『ピサロ／砂の記憶 一印象派の内なる闇』人文書院 2005年11月刊
- 第17回（平成19年度） 該当作品なし
- 第18回（平成20年度） 片山杜秀『音盤考現学』アルテスパブリッシング 2008年2月刊  
片山杜秀『音盤博物誌』アルテスパブリッシング 2008年5月刊
- 第19回（平成21年度） 岡田暁生『音楽の聴き方』中央公論新社 2009年6月刊
- 第20回（平成22年度） 白石美雪『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー』  
武蔵野美術大学出版局 2009年10月刊
- 第21回（平成23年度） 椎名亮輔『デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画』  
アルテスパブリッシング 2011年9月刊
- 第22回（平成24年度） 新関公子『ゴッホ 契約の兄弟 フィンセントとテオ・ファン・ゴッホ』  
ブリュッケ 2011年11月刊
- 第23回（平成25年度） 末永照和『評伝ジャン・デュビュッフエ アール・ブリュットの探求者』  
青土社 2012年10月刊
- 第24回（平成26年度） 通崎睦美『木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』講談社 2013年9月刊
- 第25回（平成27年度） 榎木野衣『後美術論』美術出版社 2015年3月刊
- 第26回（平成28年度） 立花隆『武満徹・音楽創造への旅』文藝春秋 2016年2月刊
- 第27回（平成29年度） 平芳幸浩『マルセル・デュシャンとアメリカー戦後アメリカ美術の進展とデュシャン  
受容の変遷一』ナカニシヤ出版 2016年7月刊